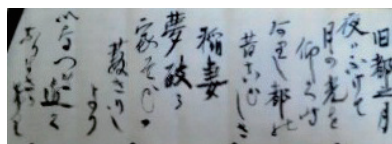


加藤一作宛森恪書簡（1920・1925年）



森恪遺歌 二首



森恪肖像（『非常時の非常手段』）



山浦貫一（左）と犬養毅（右）



「忙裏閑」
犬養毅書の火入れ

『評伝森恪』補遺——森恪関連史料について——

小山俊樹

- 一、はじめに
 - 二、瓜生外吉宛森恪書簡 附・瓜生外吉書簡
 - 三、加藤一作宛森恪書簡
 - 四、「緒言」「森恪先生伝」（『非常時の非常手段』）
 - 五、森恪遺歌「旧都之月」「稻妻」
 - 六、塩谷信男「百翁夜話——真鍋嘉一郎先生と私」
 - 七、山浦厚『兄山浦貫一・山浦康の追憶』
- 附、『小田原足柄森恪会趣意書会則』について

一、はじめに

二〇一七年二月に刊行した拙著『評伝森恪―日中対立の焦点』（ウエッジ）の掉尾に、執筆にあたって「わすかではあるが新たな材料を求め」た、と記した。没後八五年が経つ一政治家の史料を、新規に求めるのは至難の業かもしれない。想像の通り、森の自宅は戦災を受けており、伝記編者である山浦貫一も史料を残しておらず、伝記に利用された史料群の大部分は失われたとの確信を得た。

それにもかかわらず、実際に調査を始めると多くの方々のご厚意に支えられて、思いがけない史料を入手することができた。ここでは今回の執筆過程で収集した資料のうち、森恪の未公刊自筆書簡、通常では閲覧できない幾つかの文献、拙著に直接掲載できず、補遺として紹介するものなどを選定して、簡単な解題を付す。後学の参考になれば幸いである。なお断りのない限り、史料の字体は新字に直し、句読点などはそのままとした。

二、瓜生外吉宛森恪書簡 附・瓜生外吉書簡

左に翻刻した森恪関連書簡四点は、森の妻栄枝の実家である瓜生家の所蔵するものである。山浦貫一編『森恪』には、森恪と瓜生家の通信が二八点紹介されている（表参照）が、現存する書簡四点はいずれも『森恪』に掲載されたものではない。なお瓜生家の史料については、すでに長南政義・伊藤隆両氏が調査を行っており、本書簡の存在も『近現代日本人物史料情報辞典3』（吉川弘文館、二〇〇七、五三―四頁）に紹介されている。

【表「瓜生家宛森恪書簡」（『森恪』掲載分）】

番号	差出人	宛先	和暦年	年月日	概要	出典	備考
1	〔上海 森恪〕	〔榮枝宛〕	明治45	1912 03 17	〔内容不明〕（「三月十七日とは、蔣のいう孫文・森会談の翌日に他ならない」小島 ²³⁴ ）	森恪 160	
2	〔上海 森恪〕	〔榮枝宛〕	明治45	1912 04 03	〔内容不明〕	森恪 160	
3	黄海航行の春 洋丸にて 恪生	横須賀瓜生外 吉様御内 瓜生榮枝様	明治45	1912 04 13	四月三日出の御手紙昨朝旅先より帰って落手：昨夜俄に上海出發帰朝：途中芦屋に盛宣懷を訪ね更に大阪の父を見舞ひて直様上京の心組：時に此の一閑を貪ぼるの快あり。明朝長崎上陸の筈	394 森恪 160	
4	塔ノ沢環翠樓 にて 恪生	横須賀瓜生外 吉様御内 榮枝どの	明治45	1912 04 24	小生昨朝当地に来着：三四日滞在の上帰京シナ行の仕度：馬上宮ノ下に一遊を試み候：	森恪 158	
5	午後三時 芦ノ湖畔 恪生	横須賀瓜生外 吉様方 榮枝様	明治45	1912 04 25	本朝、馬蹄を此の地に印し申し候：是れより塔ノ沢に帰ります	森恪 158	
6	恪生	横須賀瓜生外 吉様御内 瓜生榮枝様	明治45	1912 05 27	今回は屢々御面会致し本懐に有之候。扱て小生一昨二十五日朝東京立、同夜大阪着：翌二十六日は：午後は芦屋に盛宣懷氏と会し：今日は思出多き「五月二十七日」に候。横須賀御両親には一層御多忙と存候：本船は上海へ直航致候間：	161 森恪 160 395	
7	上海 恪生	横須賀瓜生外 吉様御内 榮枝殿	明治45	1912 07 15	：人の持て余した製粉工場二ヶ所を引き受け：剛氏愈々大学を卒へられし由大慶に存候：復た又義男氏近々此の方面に御来遊	森恪 875	
8	上海 恪生	横須賀瓜生外 吉様御内 瓜生榮枝様	明治45	1912 07 30	二十四日の御状嬉しく拝見：陛下崩御の悲報は：日本は今より急速に代議政体の発展を見るに至るべし：吾人の舞台たる第二の御代は恍として眼前に展開す：	166 森恪 163	
9	上海にて 森恪	〔榮枝宛〕	大正元	1912 09 16	：小生昨日南京に赴き本朝帰宅：明晩出發大連に急行：二十八九日頃北京着の心組に有之、当地へは来月五六日頃帰来可致候	森恪 162	
10	〔森恪〕	〔榮枝宛〕	大正元	1912 10 14	：年内迄には小生帰朝致す必要あり	森恪 862	

19	18	17	16	15	14	13	12	11
東京帝国ホテル 格	北京 格	北京 森格	上海三井洋行 格	朝十時半 黄海上 大洋丸にて 格	車中にて 格	〔森格〕	上海三井洋行 格	上海三井洋行 格
小田原 森栄 枝殿	小田原瓜生邸 御内 栄枝殿	小田原瓜生邸 内 森栄枝殿	下谷根岸瓜生 外吉様御内 瓜生栄枝殿	東京市下谷区 根岸笹の雪通 り 瓜生外吉 様御内 瓜生栄枝様	下谷根岸瓜生 外吉様方 瓜生栄枝様	〔栄枝宛〕	横須賀瓜生外 吉様御内 栄枝様	横須賀瓜生外 吉様方 瓜生栄枝殿
大正5	大正5	大正4	大正2	大正2	大正2	大正元	大正元	大正元
1916 04 06〔26〕	1916 01 18	1915 12 27	1913 06 10	1913 03 24	1913 03 18	1912 12 28	1912 11 14	1912 10 16
先日は御邪魔致候。其許の暮方大に満足：新を英雄に育て挙げ る事：凡庸の児を得ん事は小生の希望にあらず：新の様子を見 るに或は教育に耐へる逸物なるべし：	ず： ：小生としては五十迄は家や其許等の事は念頭に留むる事能は ず：	瓜生家に隣れる小家に御引移の由甚だ我意を得たる御取計、満 足に御座候：小生明春に入らば上海、鉾山、北京の三処を住所 と致す事と相成：	的行動は三井の人間としては極めて不穩： ：安正鉄道の事は藤瀬政次郎氏幸に度量大にして：小生の独断	：宋教仁と申す革命派の一首領終に袁世凱一派の暗殺致す処と 相成候。孫氏も上海上陸の際は十分保護を加ふるの要あるべく と存じ小生等に於て工夫致居候。流石に孫自身は何等意に介せ ざる模様無御座候：	て三池に急行可致候 昨夜神戸を發して今三田尻：東京・大阪間は山本条太郎氏と同 車し：極めて賑やかに候。本朝九時馬関に着し、直に博多を経	：年既に暮れなんとす、心静かに御越年被相成可候	は能き学校と可申す。 ず：御殿山へは時に御出盧可然と存候：益田家は貴女にとりて	：小生一昨朝無事帰居：新聞に抛れば御尊父様には近来仲々御 繁忙の御様子：昨日孫逸仙と会見の結果、同人は月末に日本に 赴く由にて頻りに小生に同行を迫り申居候：
781 森格 870	192 森格 191	877 森格 876	865 森格 866 165	森格 864	森格 863	森格 862	876 森格 873	森格 862
中公掲載 写真あり (23日付の家族 「廿六日」か 図版あり 森格巻頭に全文				「無御座候」は 「に御座候」か				

28	27	26	25	24	23	22	21	20
格	東京森格事務 所 格	東京森格事務 所 格	裕繁公司鉾務 部 桃冲鉄鉾 森格	東京帝国ホテ ル 格	北京東交民巷 格	南京にて 格	東京ステー ションホテル 格	北京交民巷 格
瓜生大人	小田原栄枝殿	小田原栄枝殿	小田原栄枝殿	小田原栄枝殿	小田原 森栄 枝殿(書留)	小田原栄枝殿	小田原瓜生邸 森栄枝殿	栄枝殿
大正14	大正8	大正8	大正7	大正7	大正6	大正6	大正5	大正5
1925 11 12	1919 12 17	1919 10 25	1918 08 14	1918 06 29	1917 07 27	1917 04[05] 05	1916 11 13	1916 08 20
揚げ被遊候方可然や…	其許此の間より健康宜しからざる由にて、一層不便なりとの事 …御左右御伺の爲め栄枝参上仕候。…此際伊東の如き東京と懸 隔せる地に御養生被遊候事は望ましからず、今の間に断然御引	…一作少年の手紙出でたり。…百エーカの田地を有せんよりは 汝が此の一部のバイブルを所有する事を望む…曾つて御耳に入 れし事あるも…	…一通の御手紙此の地にて入手…万事を投げ捨て、孝養專一と 存候…	…念とする処は汝なり。能く平素より心を緊め…	…御身は隠士貧士の妻たる心を以て御暮相成度…	…今の僕の仕事と様子が、頗る印度に於けるOneの夫れの如 き類似点ある事を感じて興味津津たるものがある…	…久振りに新に御面会相成御喜びの程遥察致候。親ならではの は育たぬものとの御来示同感也。	…余は今「クローマー」の著書を読みつ、ある…
902 森格 901、	森格 192	森格 872	森格 289	森格 192	871 森格 192、 872	873 森格 287、 874	870 森格 869、	869 190 森格 189、 866
小金義照持参	中公掲載		中公掲載	中公掲載		中公掲載 付 公は「四月五日」		中公掲載

(注) 出典・備考の数字は頁数。「小島」≡小島直記『洋上の点』(中公文庫、一九八二)。「中公」≡「森格の手紙」(『中央公論』四八巻二号、一九三三)。「森格」は初版(高山書院、一九四〇)の頁数。

① 一九一四年七月二二日付瓜生外吉宛森恪書簡

〔封筒表〕 東京麹町区富士見町一ノ一農商大臣官舎 瓜生外吉様

〔封筒裏〕 天津三井洋行 森恪

〔本文〕 拝啓 栄枝儀一昨日無事到着仕候。長々御厄介に与り難有御礼申上候。小林も元氣に有之、心丈夫の青年と存候。其内に発展の途を講やり度心組に御座候。本年は北支那一帶暑氣烈しく候。日本も仲々暑き様子に承及候。何卒御健勝に被為在候様奉祈候。頓首

大正三年七月二十二日 天津 恪

瓜生大人

② 〔一九三二年〕 月不明二五日付瓜生外吉宛森恪書簡

〔封筒表〕 市外千駄谷町五六二 森方 瓜生外吉様

〔封筒裏〕 三月十日 内閣書記官長 森

〔本文〕 拝啓 在ボストンアボット氏へ花瓶贈呈の件に付、別紙の通外務省より紐育総領事宛発信すへき旨通知有之候間、御覽に入申候。 二十五日 森恪

瓜生老台

③ 〔一九三二年〕 三月五日付森恪宛瓜生外吉書簡

〔封筒表〕 官邸 森恪殿 親展

〔封筒裏〕 千駄ヶ谷五六二 瓜生外吉

〔本文〕 アボット氏より封入の電報到達致候得共、誤字等も有之、十分に了解致し兼候。当局にて可然御判断被下度候。三月五日 外吉

恪君

④ 一九三二年五月二四日付瓜生外吉宛森恪書簡

〔封筒表〕 日暮里町元金杉一九六 男爵瓜生外吉閣下 森恪

〔封筒裏〕 内閣書記官長

〔本文〕 拝啓 其後は乍恐御無音申上候。引続き御情寧に被為在欣賀此事に御座候。先般御尊老拝借アボット氏に外務省より贈物致候件に関し只今同省より別紙報告到着致候間、不取敢貴覽に供し候。小子も明日頃より浪人と相成、久振りに野外運動の時間を得候次第にて楽しみに致居候。健康幸に良好に御座候間、御安心賜度候。頓首

昭和七年五月二十四日 恪

瓜生大人 玉案下

①の書簡は、結婚当初の森が天津支店長を務めていた時代のものである。瓜生家が小田原に転居するのは翌

一九一五年のことで、それまで父外吉・母繁子と同居していた栄枝についてのやりとりと思われる。なお横須賀鎮守府司令長官庁舎および根岸笹の雪通りにいた瓜生吉の住所が「農商務大臣官舎」となっているのは、一九一四年開催のサンフランシスコ国際博覧会を担当する事務局（農商務省所管）の副総裁を務めたことに関連すると思われる。

②④の書簡は、森が犬養内閣書記官長時代のものである。ただし日付の確定は難しい。②の封筒には「三月十日」とあるが、書簡本文には「二十五日」と書かれており、後に誤って入れられたものと推測される。③も「三月五日」と読んだが、月については断定し難い筆跡であった。

三通の内容は、いずれも「アボット」なるボストン在住の人物に、花瓶を贈った関係のものである。同時期の外交文書には、日本寄りの報道をする記者として、ボストンのクリスチャン・サイエンス・モニター（CSM）紙主筆の「アボット（William Abbot）」なる人物の情報が散見される。たとえば「アボット」は上海事変に関する「同地在留英米人」からの私信として、日本の軍事行動は中国側による租界奪回の危機を防いだとして「寧ロ日本ニ対シ感謝シ居レリ云々」との内容を公表している（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02030279800（第9画像目）、輿論並新聞論調／輿論啓発関係第五卷（A34）（外務省外交史料館））。

この「アボット（William Abbot）」は、瓜生繁子が在米留学中に寄留したジョン・アボット（John Abbot）家の親類で、同家は同じく米留学中の瓜生外吉の寄留先とも懇意であった。本書簡にある「花瓶贈呈」の一件が、瓜生外吉の人脈を用いた、上海事変をめぐる森の対米情報活動の一環であった可能性は高いだろう。

また④の書簡で、森は「明日頃より浪人」となり、「久振りに野外運動の時間を得」られるので「楽しみに」

している、と書いている。五・二五事件で犬養首相が射殺されると、森書記官長は八方手を尽くして鈴木喜三郎・平沼騏一郎政権の樹立工作に奔走したが、実を結ばず、五月二六日に斎藤実内閣が成立する。森にとって下野が本意でなかったことは明らかだが、「浪人」になれば「時間」ができるから「楽しみ」との感想は、やや負け惜しみ気味であるが興味深い。なお「野外運動」は当時森が健康のために始めたゴルフのことと思われる。書簡には「健康幸に良好」とあるが、森の体調はこの年九月に悪化し、十二月には息を引き取ることになる。

三、加藤一作宛森恪書簡

次に紹介する森恪関連書簡二点は、加藤家の所蔵するものである。足柄下怒田の加藤家は、森恪が幼少期に過ぎた地であった。同家に伺った際、床の間に森の肖像が掲げられ、左の歌を記した短冊が飾られていたのが印象的であった。

加藤家にをしへのこせる 森恪翁 勤儉慈善 のちの世までも

一作詠 下枝書

加藤一作は森の養父ともいえる加藤彦左衛門の孫にあたり、終生森恪を敬慕した。その名残を実見できたことは、誠に興味深いものがあった。

書簡は二点とも同家に額装された状態で掲げられており、封筒はない。山浦貫一編『森恪』には、加藤家と森恪の通信も四点紹介されているが、左の書簡は収録されていない。

① 貴手紙入手候。皆様御達者の由欣喜候。今回は全て諸君の御尽力にて当選致候次第に有之、大に修養して必らず此の芳志に報ゆる決心に候。尤も両三年は恐らくば修養期と存候間、長き眼にて御援勢可被下様、其許より特に諸君に御伝へ被下度候。殊に關係青年各位の御同情は小生の最も感銘する処也。本年暑中は上郡に入りて充分各位と懇談致度心組に御坐候。幸に心身頑健故御安心可被下候。勿々

大正九年六月廿日 恪

一作殿

② 明日其許の結婚の由早々より承知可相成小生も出席致度心組み候処、栃木県支部の催にて堂しても繰合難成、乍恐欠席の事に相成候。誠に残念に候得共、事情御賢察願上候。何れ帰京の上、日なく御面会御喜び申述べ、各位へは其許より宜敷御伝へ願上候。頓首

大正十四年十月廿一日 恪

一作殿

①は加藤一作が中心となって作られたと考えられる後述の冊子、『小田原足柄森恪会趣意書会則』内にも、全

文の墨蹟が掲載されている。この書簡で森は、衆院議員となった喜びを表しながらも「両三年は恐らくは修養期」と自戒の心境を伝えている。また「殊に關係青年各位の御同情は小生の最も感銘する処」として、加藤一作をはじめとする地元青年の支持と協力に感謝の意を示している。足柄の地より初当選を果たした森恪の意気込みが感じられる内容である。

②は一九二四年（大正一三）の選挙で落選した後、選挙区を栃木（横田千之助の後継）に変えて補欠選挙で当選した後のものである。国替え直後の森にとって「栃木県支部の催」は、重要な意味を持ったのであろう。支持者に対する政治家の機微がうかがえる内容である。

四、「緒言」「森恪先生伝」（『非常時の非常手段』）

森恪没後一回忌を期して、『非常時の非常手段』と題するパンフレットが関係者に配布された。一九三二（昭和七）年六月一八日の時局講演をまとめたもので、同じ文章が山浦貫一編『森恪』に収録されている。奥付は「昭和八年十二月十一日印刷」、編集兼発行人は岡本一巳。岡本は一九三四年二月、いわゆる「五月雨演説」で鳩山一郎文相を樺太工業から五万円を受け取ったと告発し、物議を醸した代議士である。森恪の陣笠として栃木から当選し、森の死によって行き場がなくなった岡本が、なぜ森の盟友であった鳩山を攻撃したのかは諸説あり、精査が必要な部分である。

ところで、本パンフレットの本文は先述の通り収録されたものなので、ここでは挙げないが、巻頭に編者によ

る「緒言」と、「森恪先生傳」と題する略伝が掲げられている。現在ではほぼ閲覧不可能と考えられるため、ここで引用紹介しておきたい。また同伝と並び掲載された肖像写真を、本稿の冒頭に転載した。

緒言

哲人の言は万古猶ほ生く、本編を目して一年有半前の自論と為すは当らざるの甚しきものなり、時勢の認識に於て即今の如く凱切を極め、処法即施を示して過ち莫きものあり、然かも顧れば政治并に政治経済の機構旧態依然たり、一年有半の凝滞知らず国運に及せるところ幾何大ぞ、吾人感慨無量なるを禁じ能はざるなり。茲に政界巨人の達見を再梓に附す、豈に唯だ故人を偲ぶよすがのためならんやと云爾。

昭和八年十二月一日

編者識

森恪先生傳

森恪先生ノ家代々武蔵国三田ニ住シ郷士タリ徳川氏入府後旗下ノ士ニ列シ代々禄五千石ヲ領ス。先考作太郎翁判事トシテ大阪ニ在住シ明治十六年二月二十八日先生ハ嫡男トシテ生ル妣ハ貞子ナリ。先生饗ニ就キ中学ノ課ヲ了ルヤ三井物産株式会社ヨリ選レテ支那ニ赴キ修業歳アリ因テ其社員トナリ上海、長沙、漢口、天津、北京ノ各地公司ニ歴勤シ我国ノ商權伸張ヲ計リテ対支貿易ニ貢献セリ、後帝國政府ニ建策シ中日実業公司ノ創業ヲ見ルヤ之レヲ統理シ製鉄国策ノ急要ニ着眼シ姚中（桃冲）鉄山ノ採鋳ヲ以テ国産ノ欠ヲ補フノ途ヲ講シ政府ノ製鉄所ヲシテ拡張ノ基礎ヲ得セシメタル等一意国富増進ニ当レリ。大正八年先生大ニ考フルトコロアリ産業ノ隆興国運ノ振

起悉ク国政ノ隆替ニ基クト為シ意ヲ決シテ政界ニ入り翌年神奈川県第三区ヨリ衆議院議員ニ当选シ次テ栃木県第一区ニ移リ爾來衆議院議員タルコト五回身命ヲ邦家ニ捧ゲ志ヲ君国ニ置キ次テ満幅ノ経綸ヲ布カント欲シ出デテハ田中義一男爵ノ内閣ニ外務政務次官トナリ或ハ犬養毅内閣ノ内閣書記官長トナリ退テハ立憲政友会幹事長総務トシテ其懷抱スルトコロヲ時艱匡濟ニ施シ勃々タル新政治氣運ノ主導者ト仰カレ將ニ大二期スルトコロアリ偶々疾ヲ獲テ昭和七年十二月十一日遂ニ逝クヤ拳世深悼森恪ノ前ニ森恪莫ク森恪ノ後森恪無シト慨歎セリ、享年五十。朝臣トシテ親任官待遇、正四位、勳三等葬ニ際シテハ祭葬ヲ賜ハルノ光榮ニ浴セリ。

五、森恪遺歌「旧都之月」「稻妻」

本稿冒頭に掲載した「森恪遺歌」は、本人の筆による二首の和歌である。森恪の妹みどりによつて「森恪兄上遺歌」と表書された封筒に入れられており、現在の森家に伝わるものである。森恪の直筆は少なく、とくに歌を認めたものは珍しい。なお山浦貫一編『森恪』には、森が詠んだ歌が載せられており、写真の二首も紹介されている（九一六頁）。

旧都之月

夜はふけて月の光を仰ぐ時　ありし都の昔こひしき

稻妻

夢破る家そひの藪きりしより　いなつま近くなりまさりけり

六、塩谷信男「百翁夜話―真鍋嘉一郎先生と私」

本稿は『文藝春秋』第八〇巻十六号（臨時増刊）特集「わが人生の師」への寄稿文の一部である。拙著にて、私は山浦貫一編『森恪』に依拠し、森恪の主治医であった塩谷信男を「塩谷信雄」と誤記し、森恪の死因を「肺炎」と「重度の喘息の併発」と書いた（三九九頁）。ところが、拙著をご覧になった片倉芳和先生より、本学史学科の澁谷由里先生を介して、ご教示と本稿のご送付を賜った。それによれば、森の主治医は満一〇五歳まで生きた「正心調息法」の創始者・塩谷信男氏であるとのことであった。そして本文によれば、肺炎と喘息という発表は世間から病状を隠すためで、塩谷氏の見立てでは、森恪の真の死因は「ギャロップ性（奔馬性）結核」なる「不治の病」であったことがわかる。

山浦貫一編『森恪』には、時折氏名の「改変」がみられる（たとえば森と小田原の選挙区で争った土居貞弥は「土井貞弥」と記されている）。拙著では可能な限り調査をした積りであったが、誤記はひとえに筆者の知識不足によるものである。ここに指摘をうけて訂正し、あわせて塩谷氏が森恪の臨終について書いた部分を紹介する次第である。なお文中に登場する真鍋嘉一郎が『中央公論』に寄せた回顧談は、『森恪』に転載されており、拙著でも言及した。こちらにも参照されたい。

百翁夜話―真鍋嘉一郎先生と私

塩谷しおや 信男のぶお

百歳になってもゴルフを楽しむ私であるが、生まれた時は骨ばったシワの塊で、「この子は育つまい」といわれたという。(略) 仙台の第二高等学校から東京帝国大学医学部へ進んだ。同級生は百二十二人いたが、生きているのは私一人である。私の健康はひとえに「正心調息法」の実践による。これは深い呼吸、正しい心、強い想念から成り立ち、腹式呼吸により宇宙の無限のパワーを体内に取り込み、心と体の健康と正しい生き方で、幸福な人生を実現しようというものである。(略)

大正十五年、大学を卒業し、現在のソウルにあった京城帝国大学の助教授となった。そして、東京帝国大学医学部にもどったのは、昭和四年のことであった。私は医局員として物理療法を学ぶため、物療内科に入った。(略) 教授は物療内科の創始者、真鍋嘉一郎先生(一八七八―一九四一)であった。(略) 漱石先生が最も信頼されていた医師で、大正五年十二月九日、漱石先生死去の際、臨終を告げたことでも知られていた。

真鍋先生は、「非科学的な治療をする者は、儂わづの弟子ではない。すぐ出て行け」と激怒された。この一言で、私は医局追放である。科学の粋を集めた近代医学の象徴ともいべき東大の医局であるから、この処分は当然のことである。しかし、東大が認めようが認めまいが、この宇宙には、そういう力が存在する。われわれの科学が解き明かしていることは、まだまだその一部でしかないのである。この考えは、今も変っていない。

東京・渋谷で内科医院を開業することにして、真鍋先生へ挨拶に行った。この時、「後日、塩谷が先生の教室にお世話になったことを誇りにお思いになるときが参りましょう」と言っただから、先生にまた怒られた。「こ

の馬鹿者！」

しかし、その日は思いのほか早くやって来た。昭和七年、森格もくかくという政友会の幹事長で、日本の政局を動かしていた大物政治家を診ることとなった。当時、ライバルであった政党から犬養毅を引き抜き、首相に据えた実力者である。しかし、ギャロップ性（奔馬性ほんばせい）結核にかかっていた。これは症状が現われたら二ヶ月で寿命が終るという不治の病である。

森格はなかなかの人物であった。覚悟もしていた。「この病気が重いことは自分が一番わかっています。この命があるうとなくなろうと、私は先生に一切お任せいたします」と三十歳の私に頭を深々と垂れた。

患者の病状はもとよりだが、困難だったのは政友会や軍部への対応であった。病名を明かさず、肺炎で通したため、「肺炎も治せないのか、このヤブ医者め！」とのしられ、あげくは権威ある医者連れて来ようとする。森格のおかげで文部大臣の椅子に坐ることができた鳩山一郎などは、東大随一と謳われた名医を連れて上り込んだ。しかし、誰が何を言おうとも、患者の森格自身が、「私は塩谷先生のご指示に従う」と言ってきかないのである。

私のような青二才のチンピラ医者では、軍部や政界の森格の子分たちは納得しない。睨みの効く重鎮が必要であった。この相談にのってくれたのが、後に国鉄総裁を務めた十河信二そごうであった。その十河が連れて来たのが、こともあろうに真鍋先生だったのである。先生も、私を医局から追い出した手前、最初はさすがに不愉快そうであったが、日が経つにつれ、顔の表情が穏やかになっていった。治療についても、私の意見を容れて下さるようになっていったのである。

森恪の死を見届けたあと、東大にもどった先生が語られた言葉を、友人が電話で知らせてくれた。

「僕は塩谷を見損なっていた。患者に接する態度、患者が信頼し、従う態度。あんな素晴らしい実地医家はない。実地医家たるもの、ああでなくてはならぬ。諸君も塩谷を見習いたまえ」

昭和十六年、私の開業十周年のパーティーで、二人の先生に主賓席に坐っていただいた。一人は、私が健康になった呼吸法の創始者で、私の生命線療法を理解して下さる科学者の二木謙三先生。いま一人は真鍋先生であった。スピーチに立った先生は、「塩谷は正當な弟子ではないが、立派に成長した」とおっしゃられた。このパーティーからほどなく先生は亡くなられたから、これが真鍋嘉一郎先生の最後の言葉となった。

七、山浦厚『兄山浦貫一・山浦康の追憶』

『兄山浦貫一・山浦康の追憶』（以下『追憶』）は、上田市上田原の山浦家にて拝領したものである。『森恪』の編者山浦貫一は、文章中にもあるように新聞記者から、森恪に仕え、さらに政治評論家として一代を為した。貫一の弟・厚の記した『追憶』は、幼少時よりの腕白さのなかに、公私を区別し、権威を物ともしない剛毅な性格や、人知れぬ心遣いをする山浦の実像を、身内ならではの逸話で描いている。余人の文では窺い知れぬ事柄を記したものとして、貴重な文面であるが、現在通常の手段でこれ入手することは困難である。

山浦の略伝としては、文中にある『信州人物史』のほか、『上田市誌』二八卷（人物篇、二〇〇三、同刊行会）に「明日をひらいた上田の人びと」の一項として山浦の紹介があり、この『追憶』を参照しているものと思われる。

る。また、山浦貫一の史料は没後に年数をかけて遺族によって処分され、まとまった形では残されていない。これらのことから、今回引用する文章は、著作物における自己言及と並んで、山浦貫一を考察する上での貴重な史料と評価できよう。なお引用にあたって、原文中の空白はそのままとした。

上田原の同家では、『追憶』のほか、森恪と鳩山一郎の色紙（『森恪』掲載のもの）、犬養毅の色紙（赤字で「崑」と書されている）および犬養と並ぶ写真（本稿冒頭に掲載）、古島一雄と犬養毅らの署名が入った煙草火入れ（同）などを拝見した。火入れには「忙裏閑」とあり、次の文句が続く。「丁卯三月 山浦君來訪 觀樹故宅時木翁一念等宿候乃各署名為後念 木翁 古一念 犬養健 仲子 道子 山浦貫一」。「丁卯」は一九二七（昭和二年、木翁（木堂）は犬養毅、一念は古島一雄の号である。護憲三派内閣の立役者となった「觀樹」三浦悟楼は、前年（一九二六年一月）に逝去している。あるいは小石川の三浦邸に一同が集まった折の記念であろうか。「仲子」は犬養毅の子健の妻、「道子」は夫婦の娘である。犬養一家と山浦貫一が深い交友をもっていたことを物語る。

『追憶』の中身はいずれも興味深いが、その文中に「兄の嫌いなものに、軍人、官僚、勲章があった」との箇所がある。それで筆者が、ご遺族よりお伺いした話で、思い当たることがあった。文中にもあるように、山浦は一九三一年に森恪と連れ立って満洲視察に旅立った。一行を満洲で出迎えたのは、当時満鉄理事であった十河信二である。戦後に山浦が没した後、叙勲が決まった後の手配等を助力したのも十河であった。その時、十河はご遺族に向かって「山浦は満洲視察の際、いくら言っても『自分は軍人がきらいだ』といって、関東軍の警護を付けてくれなかった。それには本当に弱ったものだ」と往時を語って、山浦の気骨ある性格を称えたそうである。

『兄 山浦貫一・山浦康の追憶』

ささやかな、つたない、このプリントを

生前、いつも私を心にかけて下さった

両兄

大智院貫譽一道常照居士

清賢院 康譽淨願居士の

霊前に捧げます

昭和四十八年十月二十八日

弟 厚 合掌

はじめに

兄、貫一・康の二人が亡くなってから、早くも、それぞれ、六年、八年の歳月が流れました。貫一は、昭和四十二年九月二十六日、康は、昭和四十年九月二十四日に逝きました。

「去る者、日に疎し」とかいいますが、私の場合は、年がたつに従って、一そう兄たちへの思慕が深くなります。これも年令のせいでしょうか。末弟の私に家を継がせ、墓守りをさせた 兄たちは、厳しい時代の移り変わりと

共に 日に日に斜陽化して行く苦しい立場の私に同情してか、何くれとなく私を見てくださいましたし 私にも、兄たちに甘える気持ちがありました。二人の兄を、二年間に、失った時は、父母を亡くした時よりも、ショックで、当分の間、がつくりしました。自分にも『死』というものが 近いことを 自覚しないわけには行きませんでした。

この度 両故人に、格別のご交情があつた方々にお集り頂き、故人が生前 特に親しんだ別所温泉で、半田孝海大僧正に法要をして頂くことになったのは 幸せ、この上もないことでありまして、兄たちもきつと喜んでくれることを信じます。このプリントは 歌人の峰村国一先生から 貫一の霊前にと追憶の秀歌を多く頂いたことに、ヒントを得て、急に思いつきました。かき出してから印刷出来上りまで、僅か一週間たらず、しかも、毎日の忙しい、レッスンの合い間に、何度も図書館へ行ったり、資料をさがしたり 印刷屋へ行つたりのあわたしさです。こんな次第でいかにも粗雑きわまる 内容と 貧しい出来栄えで関係の皆さま、並びに、お読み下さる方々に、ミスや失札の点の多いことをおわびいたさなければなりません。ただ、私の意のあるところを汲んで頂ければ幸いです。

山浦 厚

昭和四十八年十月二十八日法要の日

故人と中学時代からの友人で、歌人、峰村国一氏は、法要に出席できないからとて 次のような 短歌を霊前に贈って下さった。(峰村氏は、当日、氏の第七冊目の「歌集沢霧」の出版祝賀会にご出席)

(色紙)

山浦貫一君を憶ひて 国一

縦横に

筆をふるひて

政界に

睨み利かせし

君を忘れず

山浦貫一君を偲ぶ

安房の国館山町の離れ家に 語り明かせし夜もありにけり

快活な青年にしてわが友の 秀でし眉を誰忘れんや

牧水に心酔したる貫一氏 詠みましし歌に我は及ばず

下手ながらうたにつながる交はりの 長かりし日もはや遠く去る

七年忌迎ふと聞きて過ぎ去りし 月日は遠き夢の如しも

功なくてなほ生き残る我のこと 君のみ霊は嗤ひいます

上中の卒業順序吾は八回 君は十一回と名簿はしるす

川西の荒武者として若きより 畏敬せられし君なりしかな

おたがひの名をちゃんづけに呼びあひて 毎日渡りしかの上田橋

たむろして天下国家を論じたる 長池堤今もなほあり

昭和四十八年十月二十八日

峯村国一 謹献

(略)

「信州人物誌」によれば貫一は上田市図書館資料として次の如く、しるされている。

山浦貫一（ヤマウラ・カンイチ 一八九三—一九六八）評論家。明治二十六年三月十五日、小県郡川辺村（現上田市上田原）山浦善右衛門の長男として生まれる。明治四十五年上田中学校を卒業し、家は蚕種製造を営む富農であったが、操觚の志があり、上京して早稲田大学政治経済科に学んだ。卒業後、横浜やまと新聞をふり出しに、東京日日新聞（現毎日新聞）、新愛知新聞（現中日）、読売新聞を経て、戦後東京新聞顧問となり、政治記者として名声をあげ操觚界の長老とされた。

政治評論家としては、保守的傾向をもち、戦後、ひたむきに左傾する言論界に、みだりに迎合しない、ユニークな存在として、一権威であった。大戦前、昭和六年より十二年にかけて、満州、ヨーロッパ各地、東南アジア、アメリカ等を歴遊し、世界情勢を視察し、国際的に交際があった。国内では犬養毅、森恪、古島一雄、鳩山一郎らと特に親密で、保守系政治家との交際があった。評論家であるとともに実行家で、戦前戦後を通じ、政局の変

動裡には、いつも彼の活動があつたが、軍人と官僚嫌いの野人なので、その方面からは警戒されていた。また、ジャーナリズム以外にも中央選挙管理委員、外務省外交問題調査会委員、日本結核予防協会、NHK番組審議員、等の公益団体、鐘紡、帝人、日航等の顧問、相談等、中広い活動舞台をもっていた。著書は「森恪」「政局をめぐる人々」「日本政治百年史」等をはじめ、はなはだ多い。昭和四十二年九月二十六日逝去、享年七十四。

(註) (本文中、早稲田大学は卒業していないし、国鉄顧問をしたこと、勲章嫌いながら、死後正四位 勲二等瑞宝章を贈られたこと、自治省参与、日本自動車振興会理事であつたことなど記載もれが多い。)

(略)

信濃毎日新聞は同日〔昭和四十二年九月二十六日〕付で 次のように、報じている。

山浦貫一氏(政治評論家) 二十六日午前七時三十八分、川崎市虎の門病院、溝の口分院で、急性肺炎のため死去。七十四才。上田市出身。自宅は東京都大田区久ヶ原町九八九。葬儀の日取りは未定。喪主は芳枝夫人。(略)

二十七日付の同紙は次のように追記している。

二十六日朝死去した、政治評論家山浦貫一氏の葬儀は、二十九日午後一時、告別式は同二時から、東京青山葬儀所で行なわれる。葬儀委員長は、前国鉄総裁十河信二氏。

九月二十九日付の「信州民報」(上田市)のコラム「上田魂」で社長の松井政平氏は、次のように書いている。

上田が生んだ名ジャーナリスト山浦貫一氏(七四)が死んだ。氏は中央選挙管理委員ではあつたが、徹底的な野人で、得意の政治評論では、位階勲等を欲しがらる人々を笑つた。その氏が死ぬと、正四位勲二等瑞宝章を贈られた。死とは皮肉なものである。

氏の最も得意時代は、昭和四、五年のころだ。このころ氏は三十八才で、年令的にもアブラが乗り切っていた。当時の政友会森恪幹事長に親しく「新聞記者なら山貫」となっていた。山貫は名字と、名のかしらを取った愛称である。

昭和四年七月、折から犬養木堂の政友会と、浜口雄幸の憲政会^ニの天下分け目の総選挙が始まった。氏はその時、犬養側の宣伝を引き受け、有名な「犬養か浜口か、景気か不景気か」のパンフレットを出版した。このキャッチフレーズは、もとより氏の独得な新聞記者感覚から発想されたもので、これは外国の新聞にまで翻訳された。筆者はこのときパンフレットの校正係りを仰せつかった。

この選挙戦は、犬養が負けた。それから三年目に、ようやく犬養は天下を取ったが、軍部右翼の台頭で「話せばわかる」の言葉を残して青年将校に暗殺された。それを機に日本は全く暗雲に閉ざされた。それと共に、自由思想の氏も憂うつになり、軍と官僚の横暴を徹底して憎んだ。氏が勲章や階位勲等を、きらったのは、持って生まれた野人根性のほかに、情熱的な自由思想がさせたのだ。

ペン一本の世界で、正四位勲二等瑞宝章は、おそらく氏が始めてであろうが、「やア、こんなもの！」といってあの世へ去ったに違いない。

(略)

昭和三十六年一月一日 上田新聞による

我ま、哲学

山浦貫一

正月といえど、何か型にはまった固くらしい言葉を述べるのが、一応の儀礼になっている。総理大臣の新年所

感を始めとし、ミーちゃん、ハーチャンの年賀状まで、暮のうちに書いた文章だし、ラジオやテレビのあいさつでも、大概昨年製である。これが私のような自由人にはやり切れないのである。

私は年賀状は書かぬ。いや印刷しない。暮はこれでも用事が多い。頭脳が混雑している。気持が落ちつかぬ時に、起草すると、ついウソを並べる。人をいつわり、己れをいつわる。正月早々、ウソとイツワリは不愉快である。では先様の下さる年賀状に、御返事を怠るかというと然らず、広告以外のものに対しては返礼する。それが私の恒例の「寒中御見舞」である。正月になってからゆっくり休息し、気持が落ちついた頃を見はからって、起草する。この一年間の消息や所感をつづる。案外、本当の気持が表現できる。このやり方は、ちよつと考えると失礼にも思えよう。

何しろ、年賀状を先きに頂いて、それに対する返礼兼消息だ。時間的にこちらの我まゝになる。経験によると憤慨した人のあることを聞いた。しかし、それ位の自由は認めてもらわないと、私のような、自由人、我がまゝ、者は生きて行けない。私は若い頃、ずい分、人に迷惑をかけた。極端な勝手者だったからである。しかしそこは年の効で、老来ひとつ悟った。他人からも煩わされたくないが、自分も亦、お他人様に迷惑をかけてはいけない。これが私の人生観となった。これが根本の考え方になって、私は出しゃばりをやめた。時間を厳守する。金銭上のやりとりは約束を守る。もちろん理由なしに、お他人様の御馳走にはならないし、宴会が嫌い、出ても、盃のやり取りは最初からやらぬことにして、相手の了解を求める。今思えば、若い時はメチャクチャであった。今にして想えば、冷汗が出る。

代議士の選挙にでも出ようものなら、私の人生観は落選の大道になるときまっている。いやたとえ当選したと

しても、次の選挙では、落ちるにきまっている。若い頃は、俺も選挙にと考えなくてもなかった。政治記者、四十年にもなるのだから、無理もない人も言い自分でもそう思った。けれど、年をとるに従って、その気持は無くなり、遂に、終生の記者生活を貫くことになってしまった。

一抹の寂しさが無いでもないが、おかげで我まゝが通せる、という安心感の方が強い。私のこの駄文は、決して新年むきではない。ほかの皆さんのお行儀のいい年頭の言葉にくらべて、何という失礼さであろう。但しこの一文が貴方に、迷惑をかけなかっただけは確かだろうと思う。(写真Ⅱ上田市出身 東京都在住 政治評論家)

昭和三十六年十二月八日の上田新聞による

完全中立あり得ぬ 山浦貫一氏語る

上田市川辺小学校(細谷次男校長)では去る十二月三日、開校七十一周年と校舎新築五十周年、合併記念式典を盛大に開いたが、席上、同校出身の、政治評論家、山浦貫一氏を招き「世界の中の日本」と題した講演会を催し、来会した数百人の人々に感銘を与えた。

講演要旨は、「いまや日本は、自由主義陣営と、共産主義陣営の真ッ只中にあり、国論は統一されておらず、挙国一致の必至に迫られている。かつて日本は、日清、日露の両大戦に遭遇したが、国民の一致協力により、これを克服、世界三強国の一つに数えられたほどの経験もある。現況の日本は、経済と外国で世界の地位をしめるべきである。革新党の云う、完全中立、はありえない。むしろ、アメリカと提携し、これを利用して、ソ連圏に処すべきである。世界の情勢は、いつ偶発戦争が起り、いつどこで核弾頭が火を吹くか、予断を許さない。いま

の日本の壊滅は明らかである。一日も早く、公明選挙の名にもとに、国民は結集、国難の忌避に心がけ、真の民主政治の達成に努力すべきだ。」と憂国の私情を訴えた。なお氏は全国公明選挙管理委員長もつとめている。公明選挙という語は、氏の創作である。

兄、貫一の思い出

兄と私とは、年が十一も違うし、私が成長した頃は、一しよに生活しなかったので幼い頃のことは、あまり記憶にない。兄は 小学校三年頃まで、母の実家である坂城町南条の祖父の家から南条小学校へ通い、その後川辺小学校へ転校したという。上田原は、次々と妹や弟が生まれ、家業も 忙しかったので、家族の少い、祖父母は、孫可愛いさの余り、つれて行つて甘やかして育てたものと思う。南条では、甘い祖父母から ふんだんに小使をせしめて、近所の悪たれ小僧たちの親分になつて盛んにあばれまわつたらしい。祖父善五郎は、それを見て眼を細くして喜んでいた。「見ろ、貫のヤツいつでも大将になつて遊んでいるわサ」という次第。何百俵も、小作米が入る豪農油屋の孫というわけで、近所の子供は一目も 二目もおいていたものと思われる。

○

私は小学校へ入る前 お話しにならぬ わんぱくでいたずらで、大人の目から見ると悪いことばかりしていたので、一日に 何回となく土蔵に入れられた。これは母の役目で 私を横だきにして 土蔵へ運ぶのであった。土蔵の中は暗く 壁は厚く 外からかぎを掛けられると 絶対に泣き声は聞えない。そんな或る日 兄が突然しのびこんで、来て 私と土蔵の中で遊んで 砂糖をなめたり 菓子を発見して 二人で食べた。この時兄は 懐

中電灯を持っていた。私にはとてもそれが珍らしかった。兄は私に、土蔵に入れられない秘策を授けてくれた。はっきりとは言わなかったがヒントを与えたのである。

○

その次又々 土蔵に抱きこまれた時は、ひどい復しゅうをしてやった。その頃私の家は、質屋をやつていて土蔵の階上階下に 質草が無数に積んであったが その番号札を皆 もぎ取ってしまったのである。そればかりか棚からひっぱり出して 何が何やらわからぬ までゴチャ、ゴチャにしてしまった。質屋の主任の母の困つたのは言うまでもない。それっきり土蔵へは入れられなかった。「ザマ見ろ」と、ペロリ舌を出したが、これは兄よりのヒント である。

○

兄はいつも金を持っていた。どうも金まわりがいいようだ。それに比べると、康兄と私は、いつも小使銭がなかった。母がケチで くないのである。ある時康兄と私は、貫一兄の金のまわりのいいことを かぎつけたのである。お部屋の下に頑丈な木製の金箱がある。おさい銭のようなくみで金を入れると ズルズル と下へ落ちる。すき間 は、二―三センチ だから子供の手でも入らない。鍵は母が保管している。質屋に用がある人が来ると その箱を開閉するのである。

○

兄は、棒の先へトリモチ をつけては、銭を釣り上げているのを知った。そこで 康兄と 私もそれを真似してしばらく いい思いをしたものである。買うものは 山屋という 駄菓子屋へ行つて さざれ、ねじりぼう、

うさぎ玉、ようかんと言った類で、時には パッチンなども仕入れた。しかしこれも 間もなく 駄目になった。兄弟三人で 代るがわる釣り上げては、たまったものではない。感づいた母は、父と相談して 金庫へ庫替えしたので 甘い汁を吸ったのは ほんの僅かだった。ところが貫一兄は こんど金庫のカギを作って来て 相変らず うまい汁を吸っていたが、私たち二人はその恩恵に 預れなかったのである。こんなことで 父母を随分困らせた三人であった。

○

兄は上田中学を一度落第したことがあった。成績不良というのではなく、操行不良で、免状が貰えなかったのである。酒に酔っぱらって 松尾町に寝ているのを先生に見つかり 校長室へつき出され さんざん油をしばらくられた。寄宿舎へ入っていた時など、舎監の目をぬすんで 悪友と 高いへいをのり越えて、遊郭へ通ったという。酒・タバコは平気だった。

○

兄は中学四年の時 妙義山へ遠足に行った。奇石怪岩のそびえ立つ頂上の辺りに大砲岩というのがある。その上で逆立ちをしたのである。下は千仞の谷、一步あやまれば命はない。その岩の上で「俺は地球を差し上げる。」と言って逆立ちをしたという。同行の友だちは一斉に拍手をしたというが、後からかけつけた担任の先生が真青になって、その冒険を激しく叱った。帰校後職員会議へかけられ幾日かの停学を食ったそうだ。このことは当時、上田中学に関係ある者は知らぬ者はなく、何十年後の語り草になっていた。後日私も現場へ行ったのであるが、下を見て脚がすくむ思いをした。

○
兄は、内ズラは悪いが外ズラは まことによく「山貫」の愛称で親しまれていた。

上田中学で、兄より二年後輩で 日本柔道界の権威 依田誠氏（八段、現在上田市諏訪形）は つい先日、私と会食した時こんな話をしてくれた。

「山浦貫一さんには、今でも感謝していることがある。私が中学三年の時、山浦さんは五年で、同じく寄宿舎生活をしていた時です。私が、おじぎの仕方が悪いとか、態度が、悪いとかいう理由で 上級生の二十数人の前に引つ張り出されて リンチを受けたことがあった。上級生が代る代る私を、なぐったが、山浦さんは「おじぎの仕方が悪いとか態度がよくない位の理由では俺は下級生を、なぐることは嫌いだ」といつて たった一人だけなぐらなかつた。」と。

○

私が、長野の蚕業試験場で勉強して、家へ入り、蚕種業をしていた頃、叔父、善貴の命令で、千葉県、佐原市の一大繭糸市場に蚕種の増量売込みに行ったが、若さの至りから 先方の重役とけんかをしてしまった。資本にモノを言わせて、余りの買い叩きに腹を立てたからである。その結果、増量注文どころか 従来の分までも取り消される憂目にあつた。

貫一兄に泣きこむと、すぐ一所に出かけて 相手の重役と会見、一挙に従来の倍額の注文を 取りつけて呉れた。

○

信濃銀行が倒産したのは 昭和五年であつたが、川辺銀行からの関係で 大株主であつた私は、未払込金の請求に 日夜戦々競々の日を送つていた。その時も兄は東京で、信銀の重役と政治接渉をして未払込金の免除の確約をとりつけて呉れたので蘇生の思いをして終生忘れない。

○

康兄と私は、相談して、時々、株をやつたが、結局、かなり穴をあけて、二人では、始末がつかないことがあつた。その時、兄は大きな声で 二人をどなりつけて、「ワンダレが株をやるとは、なまいきだ。株なんか、オレがやるもんだ。今後決してやるな。」と。最後は尻ぬぐいをしてくれたものである。

○

私は、昭和十一年に胃かいようで二ヶ月、昭和十五年に腸チフスで一ヶ月、東京で入院したことがある。その時、兄は忙がしいところ、ほとんど毎日 病院を訪ねてくれた。腸チフスの時は 一流病院の一等室へ入院させてくれ 手作りの野菜物を毎日ほこんでくれて 入院一切の費用は 兄が出してくれたには恐縮した。入院當時、兄は志摩の姉のところへ行つて「弱つた、弱つた」を繰り返えし へたへたとしやがみこんでしまうほど心配したそうである。

○

兄は一応有名人であつたので 郷土の人々からよく何か頼まれたが、その時は必らず私が、窓口となつた。直接、兄のところへ頼みに行つても 私のところへ照会が来て、私の意見を聞いた。えらいと思つた。川辺小学校同窓会歌も、川辺小学校歌も 私が窓口となつた。その都度「ワレ、つまらぬこと メタ 言つてよこすもんだ

から、オラ ひでえめにあった。」とよくこぼしたが 快く引き受けて呉れた。

昭和の中期の頃だったが、青年学校で、楽器が必要な時があった。その時も当時の金で式百円だったか寄付したが 名を出すことを嫌って匿名氏として処理したことがある。

○
何かで、感謝状など頂くと「オレは、こういうものに興味がない。ワレ取っておいてくれや。」と言って家へおいて行つた。

○
兄名義の田畑が 上田原に数千坪あった。これは、兄が買ったものであるが、農地改革で全部解放となった。不在地主であつたからである。私がすゝめて買わせた土地であつたので私も、兄に対して本当に、悪いことをしたと思つて詫びたが、兄は、愚痴は一言も言わなかつた。後年、農地解放者に対する補償論議が、全国的に盛んになった時、当地方の 急先鋒、岡崎袈裟男氏（私の親せき、前上田図書館長）が、貫一を訪ね、側面から政府へ働きかけて呉れるよう頼んだ。ところが、その時の兄の返答が振つていた。「岡崎さん、そんなことは折角だが駄目でごワス。ワシはお引き受け出来やせん。世界のどこの国を調べたつて、農地改革を経ないで民主国家になつた例はありやせん。」と、その数年後、農地解放者に 報償金が、交付されることになつた時、兄は、いつまでたつても、その手続きをしない。私は、金も必要だつたし、手続きをしたついでに、兄の分もしてやり、そのことを報告すると、喜ぶと思いきや、不愉快な顔で、余計なことをすると言わんばかりだつた。このことは志

摩喜一氏もよく知っている。

○

昭和の初め、川辺村でも、電話が、ほしいというので、郵便局長をはじめ蚕種業者や大勢のお歴々が、架設運動を展開したが、既に架設済みの浦里、中塩田。塩尻、上田等へ近距離すぎることや、その他の理由で、何としても許可がおりないで、当分過ぎた。その時誰やらが、「山善さまの貫ちゃんに頼んで見たら……」ということになって、二、三人で上京して兄に、その旨依頼した。兄は、時の通信大臣と特に親しかったので、やって見ようということで、大臣と直接交渉で間もなく許可がおり、めでたく電話が架設された。

その功勞として川辺 一番 の電話が、当時の信濃蚕業社代表の山浦善貴に割当てられた。

○

兄は、公私の区別をはっきりさせる性格であった。NHK・国鉄・自治庁・中央選管・東京新聞など 幾つかの団体に関係を持ち、その意志さえあれば、いくらでも専ぞくの車は使えたのだが、自分は、いつも電車で通勤していた。国鉄顧問であったので、全国通用のグリーン車のフリーパスを持っていたが、私用の時は、決して使わなかった。或る時、上田へ講演に来て、帰京しようとしたが、どうしても切符が入手出来ない。次の忙しい会合があるのでどうしても帰えらねばならない。その時、「オレは、こういうことは、やだけれど、これを持って行ってみせて、切符買って来てくれや」と私に命じた。国鉄顧問のフリーパスである。上田駅から新潟駅へ電話して切符は直ちに入手できた。

○

昭和七年、兄は 鳩山一郎や森恪ら、時の政友会幹部のすゝめで欧米視察旅行をした。全部船旅ではあり、口サンゼルスのアリンピックにも出席したので、半年近くもかかった。

ところがロンドンで、あるパーティーでダンスの最中、トラベラーズ・チェックを紛失したか、盗まれたりしてしまった。外国で、金を失った程、はじめなものはない。早速、留守宅から電信ガワセで金を取り寄せ、急を脱がれた。一方全世界の横浜正金銀行支店に緊急手配した。数ヶ月後、帰国して現金を受取る段になると、何と紛失した額よりも 何割も余計に 日本円を入手したという。「オレはロンドンで、金をなくしてもうけたよ。」とは カワセ相場変動時のこぼれ話である。

○

兄は 若い時分、歌人になろうと志した。

小諸在の大里小学校で代用教員をしていた頃から、歌人若山牧水の人柄と作風に あこがれを持ち師事した。長女牧代の牧は、牧水からとったものと私は思う。

○

兄は酒が好きだった。牧水の感化を受けたのか、新聞記者と言う職業柄か、兎にかく酒を愛した。上田へ来ると 天神町の山川亭で馬肉で一杯やるのが好きだった。近藤牛肉店の土屋久雄さんとは中学同級で、悪友でもあったらしい。上田へ来ると必ず訪ねて盃を重ねた。兄から政界裏面話、つまり新聞に出ない特ダネを聞くことの出来たのはいつも 酒を飲んだ時であり、私たち兄弟は、いい酒を用意して、川魚を買って来ては、政界裏話を聞いた。敗戦の昭和二十年八月十五日は、私など 五日前の十日に、兄から「戦争はすぐ終る。ガタガタあわて

るな」と聞かされていたので、別に驚かなかった。

○

兄の嫌いなものに、軍人、官僚、勲章があった。えらそうに偉張り散らす者は、何でも嫌った。大戦中、軍人内閣を批判し、こつびどく評論するところから、東条首相に、にらまれて、執筆停止を食い、何か書くことを厳禁され 特高警官が、いつも尾行していた。

○

NHK会長の、阿部真之助、評論家の岩淵辰雄とともに、兄は、政治評論家の三羽鳥といわれ、政治家、殊に若い大臣などには、先生と呼ばれていた。小坂善太郎氏や、井出一太郎氏などと、テレビ座談会をしているのを見たことがあるが、二人とも兄を先生と 呼んでいた。後日、自治大臣が、青山葬儀所で読んだ 弔辞を 見ると、山浦貫一君の君を消して先生となっていたのもおもしろい。多分、事務官が 書いたものを 大臣、自ら訂正したのであろう。

○

池田内閣の時、前記三人の評論家に勲章を贈るということが閣議で話題になった。あまりに、政府を叩くものだから、ハナグスリをかがせて論評を柔らげようとの、こんなことから。三人の侍は、絶対に勲章なんか もらつてはならぬと結束をした。ところが、岩淵だけは、貰つてしまった。後で、約束がちがうではないかと詰問すると、「俺は、あんなもの欲しくはないが、女房の奴が、貰え、貰え、としきりに言うもんで、ついどうも」ということだった。阿部と兄は死んだら、勲章が届いた。阿部は兄より九才年長だったので勲一等で、兄は勲二等だった。

調べることがあつて土蔵の古文書類を整理していると、偶然次のような 珍らしいものが出て来た。これは貫一が中学時代（多分 十六、七才）の非行の故を以つて親父から、さんざん油をしぼられた結果、父に入れた誓約書と思われる。明治四十二、三年頃のことであろう。

請 文

一、 父母ノ命令ニハ絶対ニ服従スル事

一、 毎日家族中第一ニ起床スル事

但シ事宜ニヨリテハ此限りニ非ズ

一、 通学中無用ノ場所ニ立寄ラザル事

一、 夜分止ヲ得ザル他、外出セザル事

一、 自分ノ日用品其他ハ処理スル事

一、 一意専心勉強ニ努ムル事

私儀、今日迄非行ノ為 甚大ノ御心配ヲ煩ハシ、誠ニ申シ訳之ナク今般、松井氏ノ御好意ニヨリ御寛恕相成リ候ニ就テハ以後必ズ素行ヲ改メ御心配ヲ煩ハスガ如キ事無キ様努ムベク候 就テハ右記ノ条項遵守致スベク候

二月六日

本人 山浦 貫一（本人署名）

証人 松井 鳳平（署名）



四者会談（左より緒方・富豪夫人・吉田・古島・山浦）

父 上 様

父、善右衛門が作った誓約書に いや応なしに署名せられたものと思われる。後日 総理大臣を向こうにまわし 縦横無尽に 批判評論して心たんを寒からしめた貫一兄も 少年時代は 親には頭が上らなかつたらしい。然し この誓約が どれ程続いたか、全く不明である。又松井氏は現在原峠保養園の園長である。八十七才。

政変の時は、昭和三十年の初頭まで、多くの場合、裏の舞台で貫一は動いたようだ。いわゆる忍者行動をしたものらしい。鳩山一郎が、自由党総裁として、組閣直前に、追放令にひっきり、政界出馬が不能に陥ったことがあった。昭和二十一年春のことである。

自由党の最長老、古島一雄は総裁に推されたが固辞し、意見を貫一に求めた。二人は特別の関係にあった。貫一は、吉田茂を推せん、吉田茂の 補佐役として、朝日新

聞出身の 緒方竹虎を進言した。この写真は、三重県出身の富豪某家の座敷においての、古島、吉田、緒方、山浦の四者会談で、女性は富豪の夫人である。(後略)

附、『小田原足柄森恪会趣意書会則』について

森恪の最初の選挙地盤は、小田原を中心とする神奈川県西部地域であった。この地での当選はわずかに一回であるが、その間に森は政党政治家として、地域利益の増進に尽力した。筆者は同地における森の支援者であった先述の加藤家を調査したところ、戦後に森恪の業績を顕彰するために設立を呼びかけた「小田原・足柄森恪会」の設立趣意書をご提供いただいた。

本趣意書には、森恪の地元での活動に触れ、山浦貫一編『森恪』で簡略化された実績や支持者などが、詳らかに分かる部分がある。鴨之宮駅(現「鴨宮駅」、小田原報徳信用組合、小田原電鉄(箱根登山鉄道・バス・三枚橋発電所など)の経営、関東大震災からの復興、相州電気の買収と電灯普及、大日本セルロイドの誘致(現在の富士フィルム工場であり、元は森の経営する小田原紡織の敷地であった)、そして新宿―小田原を結ぶ小田原急行電鉄の建設など、同地の地域経済に少なからぬ影響を与えた諸事業の数々に触れている。また栃木那須への選挙区替えにとまなう足柄の支援者とのやりとりもわかる。その正確性には留意する必要があるものの、森恪による同地での活動概要をつかむのに簡便であろう。

なお、趣意書の後段に付された賛同人の名前も、本会についての想像の手がかりを与えてくれる。森恪の盟友・

鳩山一郎の妻薫をはじめ、森恪にゆかりのある人々が名を連ねているが、それと同時に当時の神奈川西部における市町村首長、地域企業などが賛同している。あるいは戦後における同地域の保守政治勢力基盤を表すものと考えられる。

ただし、右のように興味深い史料ではあるものの、著作権等の関係上、原文の紹介は別の機会に譲ることにしたい。あるいは公共機関への原本寄贈などの方法によって、広く活用を図りたいと考えている。

末尾ながら、今回史料の掲載を快くご承諾頂いた、瓜生節子、加藤千代子、塩谷信幸、森豪、森文彦、山浦健太郎の各氏に、厚く御礼を申し上げます。

